（1）　（明治25年３月28日第３種郵便物認可）　THE JOMO SHIMBUN　（日刊）

中島元文相が急逝

62歳、肝不全で
衆院議員を7期18年

衆院二区選出元文相の中島源太郎（なかじま・げんたろう）氏が七日午前一時三十二分、急性肝不全のため東京都新宿区の慶応大病院で死去した。六十二歳だった。中島氏は昨年暮れに入院したが、容体が急変、危篤状態に陥っていた。竹下内閣で文相に就任、現代、三塚派に所属、七期十八年務めた。自民党東京都連会長代行、衆院予算委員長、同党国会対策委員長、駒場クラブ二代目会長などを歴任した。

家族の話によると、中島氏は、昨年暮れから入院ドックに入っていたが、先月二十四日ごろから体調を崩し、肝不全を起こし、先月二十四日、中島病院に入院。容体が急変し、七日午前十時三十二分、息を引き取った。

中島氏の自宅には同日夜遅くまで弔問客が訪れた。中島氏の突然の死を悼んだ。

中島氏は昭和四年二月十一日、中島飛行機の創設者で政界に転じた後、商工相、鉄道相、衆院議長などを歴任した故中島知久平氏の長男として生まれた。慶応大経済学部卒業後、大蔵に入省。かねがね「政治家になるのが夢だった」という中島氏は、昭和四十二年の衆院選に旧群馬一区から自民党公認で立候補、初当選。通産、運輸両政務次官、衆院予算委員長、自民党国会対策委員長、駒場クラブ会長などを経て、平成元年八月、海部内閣の文相に就任。

文相在任中は、教育改革に意欲を燃やしたが、教育現場の荒廃を憂慮、「学校の先生は聖職であるべきだ」などと発言、教育現場の反発を招いた。

文相在任中は、教育改革に意欲を燃やしたが、教育現場の荒廃を憂慮、「学校の先生は聖職であるべきだ」などと発言、教育現場の反発を招いた。

別式は十二日午後一時から東京都港区青山二ノ三二の青山葬儀所で営まれる。喪主は妻のたねさん。同選挙区で、先に社会党の須永徹氏が死去、中島氏の急逝で今回、二選挙区となった。

政治上の同志として苦楽

文部行政に新風吹き込む

見識と人柄で政治的な実績

企業間競争を描いた産業スパイ小説「黒の試走車」や特撮

16日に地元葬

中島後援会は七日夜、緊急会議を開き、地元葬の日程、喪主などについて話し合った。この結果、十六日午後二時から太田市民会館で営む。

県内初の補選に

投票は来月22日か29日
候補擁立へ動き急

衆院２区

中島元文相の突然の死去で、衆院群馬二区（定数三）の補欠選挙が決定した。今夏の参院選を控え、国政に影響する重大な選挙になるほか、これまで続いた"保革議席"を擁立していく方針。これまで続いた二区だけに、各党は七次の選挙に備えて動き出した。

自民党県連は「公認候補を必ず二人立てたい」（船沢本部長）とし、中島後援会長代行）が、やはり「弔い合戦」とする社会党県本部は、二区に強い県労評を中心とした組織固めを急ぐ。

また、共産党は「候補者については白紙」（角田義一・参院議員）と慎重な構えだ。

公明党県本部は十二日の県本部役員会で対応を協議。民社党県連は態度保留。内閣総理大臣の吉田茂男氏、須永氏夫人の敏江氏、県議の山下勝氏らの名前が浮上。選挙委員会を急きょ、八日に招集するなど、共産党も含めた各党の見方が錯そう、選挙戦本格化の様相を呈してきた。

県議会議員は七日の総会で、中島氏の死去を悼み弔意を表明した後、二選挙区の候補者擁立を申し合わせた。

◇

須永氏に続く中島氏の死去で、衆院二区は六月二日と七月二十四日の二回にわたり、公明党県本部は十二日の公認選考委員会で対応を協議。民社党県連は態度保留。内閣総理大臣の吉田茂男氏、須永氏夫人の敏江氏、県議の山下勝氏らの名前が浮上。選挙委員会を急きょ、八日に招集するなど、共産党も含めた各党の見方が錯そう、選挙戦本格化の様相を呈してき